那須野が原博物館　中期目標項目・評価シート
第2期（平成29～33年度）

平成30年度

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標		33年度目標値(5か年)	期間実績合計	30年度目標値	30年度実績	備考
1．収集・保存・活用								
1-1　資料の収集	収集方針をもとに採集・寄贈・購入等を通して積極的かつ継続的に資料を収集します。	新規収集資料件数	採集・購入他(全分野)	1,460件	684件	292件	180件	
			1.歴史	400件	165件	80件	48件	華族関係資料ほか
			2.民俗	25件	41件	5件	4件	家電関係ポスターほか
			3.考古	0件	0件	0件	0件	
			4.美術	10件	7件	2件	4件	高久靄厓書簡ほか
			5.文学	25件	22件	5件	4件	塩原関係作品ほか
			6.地学	50件	16件	10件	8件	昆虫化石ほか
			7.植物	150件	0件	30件	0件	
			8.昆虫	750件	379件	150件	84件	購入22件(クワガタムシ類)
			9.動物	50件	54件	10件	28件	購入2件（哺乳類）採集26件
			寄贈(全分野)	―	3,355件	―	2,481件	歴史1,082件、民俗161件、文学6件、美術158件、地学19件、植物19件、昆虫1,036件
			合計	―	4,039件	―	2,661件	
		収蔵資料総件数		―	82,414件	―	82,414件	H31.3.31現在 歴史20,327件、民俗6,120件、考古4,284件、文学76件、美術3,916件、地学672件、植物5,049件、動物41,970件
		新規収集図書件数	購入	150件	38件	30件	15件	
			寄贈	―	―	―	772件	
		収蔵図書総件数		―	17,830件	―	17,830件	
1-2　資料情報の公開	収蔵資料データベースの公開を行い、研究者等による利用を促進します。	収蔵資料情報公開件数		5,000点	2,745点	1,000点	1,768点	実績：歴史53件、民俗456件、美術223件、昆虫1,036件
1-3　資料の適切な管理	収蔵庫・展示室を良好な環境に保ち、燻蒸により資料の安全な保存を図ります。	燻蒸回数	那須野が原博物館	5回	2回	1回	1回	
			附属施設	5回	2回	1回	1回	黒磯郷土館
	資料の修復等を行い、資料の保存状態を改善します。	資料の修復	歴史資料	25件	21件	5件	9件	錦絵や書簡等の修復
			考古資料	15件	5件	3件	2件	土器の修復
			美術資料	25件	14件	5件	1件	日本画修復および屏風装
			常設展示	―	―	―	1,027件	
			企画展示	2,500件	1,649件	500件	1,516件	塩原展202件、昆虫展978件、華族農場展200件、家電展136件

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標		33年度目標値(5か年)	期間実績合計	30年度目標値	30年度実績	備考
1-4　資料の活用	常設展示・企画展示等による資料の利用・公開を促進します。	展示利用数	トピックス展他	750件	473件	150件	333件	トピックス展308件、なはくAS25件
			黒磯郷土館	―	828件	414件	414件	
			日新の館	600件	245件	120件	173件	
			関谷郷土資料館	―	1,440件	720件	720件	
	収蔵資料を他の博物館・美術館等へ貸し出します。	貸出資料数		―	142件	―	51件	ﾓﾆｭﾒﾝﾄ5件、化石2件、歴史25件、民俗13件、考古3件、美術1件
【特記事項】	特別展・企画展展示資料として、塩原関係資料や華族関係資料等を重点的に購入したが、全体的に目標値を下回った。資料の公開については、民俗分野（衣に関する資料・計456点）と美術分野（高橋由一作品や竹工芸など・計223点）などにおいて実施した。資料の修復については、錦絵や書簡の裏打ちを9点、縄文土器を2点、王欽古作品の日本画を1点実施した。資料の活用については、全体的に目標値を上回った。特に、常設展の一角に現代アート作品を紹介する「なはくアートスポット」というコーナーを設けたため、その展示資料数も加えた。収蔵資料の貸出先は、アクアマリンいなわしろ水族館や神栖市歴史民俗資料館、栃木県立博物館などである。							
【課題・改善点等】	新規収集資料件数のうち人文分野の資料件数が目標値を下回った原因としては、予算が昨年度に比べ大幅に減額となったことが挙げられる。自然分野は特に植物・昆虫分野において調査と連動した採集活動が必要である。今後も採集・購入・寄贈等により継続的に収集していく必要があるが、収蔵庫のスペース不足に伴う資料の安全な保存環境の確保に加え、予算の確保が重要な課題となっている。資料の公開については、積極的な情報の公開に努める。資料の活用については、引き続き企画展示やトピックス展において、収集した資料を積極的に利用・公開していく必要がある。							
【外部評価委員 所見】	資料の収集について、目標値に対する実績は61%にとどまり、目標値を大きく下回った原因が予算の大幅な減額にあったことは、博物館の運営に対する市政を疑うものである。博物館の事業・活動を展開するうえで、資料収集を行うことは大変重要なことであり、今後も継続して収集活動を行っていただきたい。また、収集された資料が収蔵庫のスペース不足により、適切な保存が難しい状況にあることに大変危惧する。予算の大幅な減額に加え、収蔵スペース不足という現状は、博物館としての本来の姿から大きく逸脱しているのではないか。これまでの評価でも厳しく指摘している通り、収蔵庫の増設に努められたい。							
2. 調査研究								
2-1　調査研究活動の推進	地域に関するテーマや博物館活動に関する調査研究を行います。	那須野が原博物館紀要発行回数		5回	2回	1回	1回	
	研究成果を広く市民に還元します。	学術論文の執筆数、発表会や講演会の回数		50回	42回	10回	33回	論文7件(紀要6件・研究雑誌1件)、発表5件、講演21件
【特記事項】	那須野が原博物館紀要第15号を発行した。紀要の掲載内容は自然分野が4件（昆虫1件、動物2件、植物1件）、人文分野が3件（美術2件、歴史1件）である。 論文は、紀要で6件（昆虫1件、動物2件、美術2件、歴史1件）、研究雑誌で1件執筆した。発表は、地域研究発表会で2件（歴史、美術）、活動報告会で1件（民俗）、研究発表会で1件（民俗）、研究交流会で1件（動物）、日本遺産発表会で1件（歴史）行った。講演会は、講義で2件、セミナーで2件、公民館で5件、研修会等で11件行った。							
【課題・改善点等】	紀要は調査研究成果の公表のために、今後も毎年1回継続して発行する。那須塩原市で実施している動植物実態調査や地域研究者等と協働・連携を図り、地域の解明に努めたいが、執筆者の確保が課題となっている。また、「J-STAGE」といった学術情報検索サイトにおいて、PDFで論文を公開することにより、より多くの方に活用していただけるように努める。							
【外部評価委員 所見】	那須野が原博物館が毎年発行している紀要は、博物館の調査・研究の発信の場として重要なものであるので、今後も発行を継続してもらいたい。 また、学術論文の執筆数、発表会や講演会の回数は、目標値に達しているが、市民との連携・協働をさらに高めるためにも、今後の活動のさらなる拡大を期待する。							
3. 展示								
3-1　常設展示の充実	常設展示の内容や展示資料の見直しを図ります。							引出し展示(昆虫標本)の入れ替え及び実物資料から複製への差し替え
3-2　企画展示の開催	地域または各テーマに対する市民の理解を深める目的で開催し、資料を有効に活用します。	企画展示の開催回数		20回	8回	4回	4回	
		企画展示の観覧者数（学校を除く）		90,000人	54,960人	15,000人	15,344人	H29　30,000人／年 H30～　15,000人／年
		観覧者の満足度（平均）		90%	1	90%	95%	5段階評価のうち、上位2位の合計　塩原展94%、昆虫89%、農場展98%、家電97%

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標	33年度目標値(5か年)	期間実績合計	30年度目標値	30年度実績	備考
3-3　企画展示の理解促進	図録の発行、記念講演会や展示解説、ワークショップなどの関連事業を開催し、展示趣旨を分かりやすく伝えます。	図録の発行件数	5件	1件	1件	1件	『那須野が原に農場を』
		関連事業の参加率	70%	1	70%	90%	塩原展48%、昆虫展119%、農場展102%、家電
		参加者の満足度（平均）	90%	1	90%	94%	塩原展100%、昆虫展96%、農場展81%、家電展
3-4　トピックス展の開催	資料を積極的に活用するほか、調査研究によって得られた情報を公開します。	トピックス展の開催回数	66回	18回	11回	11回	
3-5　意向調査	市民の意見を積極的に収集し、ニーズの把握に努めます。	意向調査(アンケート)の実施回数	20回	1回 H30～通年	4回	通年	展示アンケートに意向調査の項目を追加し、通年で実施
3-6　附属施設の展示	附属施設の常設展示の見直しを図ります。企画展を開催し資料を有効に活用します。	黒磯郷土館・関谷郷土資料館常設展示の見直し					黒磯郷土館：展示施設のキャプション変更、津久井家住宅の展示見直し
		日新の館企画展の開催回数	25回	5回	5回	5回	
【特記事項】	4回の企画展示（特別展：「那須野が原に農場を−華族がめざした西洋−」、企画展：「野州塩原−温泉と渓谷に魅せられた人々−」、「なす昆'18−昆虫採集、まっ最中！−」、「うちにテレビがやってきた」）を開催。H30年度観覧者総数：20,008人（うち学校見学3,974人）・利用者数28,875人。学校を除いた企画展示観覧者数は15,344人で目標値を2%上回った。特別展「那須野が原に農場を」は、那須野が原の華族農場の経営や別邸での生活などについて紹介した。図録は好評で、関連事業の参加率も高かった。観覧者数4,195人（目標値4,500人）。企画展「野州塩原」は、塩原の特徴を自然・人文分野から総合的に紹介した。分野を横断した企画展は、当館初の試みとなった。観覧者数は1,596人（目標値2,500人）。企画展「なす昆'18」は、那須地域に生息する昆虫の特徴や暮らしぶり、採集の方法を紹介した。昆虫採集をテーマとしたハンズオンが好評だった。観覧者数は5,527人（目標値4,200人）。企画展「うちにテレビがやってきた」は、昭和30年代から50年代に普及した家電製品を展示するとともに、ジオラマで当時の生活を紹介した。展示や広報にキャラクターを起用し、主に親子層に親しまれた。観覧者数は3,236人（目標値3,500人）。日本遺産認定により、インフォメーションルームを日本遺産紹介コーナーとしてリニューアルした。なお、今年度から意向調査をアンケートの項目に追加し、通年で実施した。						
【課題・改善点等】	特別展「那須野が原に農場を」は日本遺産認定・明治150年の記念事業として、企画展「野州塩原」はDCキャンペーンの一環として実施したが、想定していたほど観覧者数が伸びなかった。今後は担当部署との緊密な連携や相乗効果を上げる広報戦略が求められる。企画展「なす昆'18」は、応募型イベントの仕掛け方とSNSを活用した情報発信が課題となった。企画展「うちにテレビがやってきた」は、回想法との結びつけが薄く、高齢者層の増加につながらなかった。 今後の企画展示全般の課題としては、展示内容や表現方法の充分な検討、訴求力のある広報デザイン、メインターゲットの充分な検討と効果的な広報手段の確立などが挙げられる。						
【外部評価委員 所見】	4回の企画展が行われたが、全体的にいうと参加者が少なかったと思われる。その中にあって、「なす昆虫 '18」については、展示内容が小学生や幼児の興味関心が高く、開催期間が夏休みであり入館者が多くあったと考える。 展示する資料や手法などは、観覧者の数や鑑賞した結果の満足度に影響すると考える。「野州塩原」や「うちにテレビがやってきた」の企画展は、平成28年度の企画展「塩原温泉ストーリー」や「昭和のくらし探検隊」と内容や展示資料に重複があたっと思われ、2年以内に類似の企画展を開催するなど、観覧者の数に影響したものと考える。 また、展示してある資料に書かれた文字が小さく読みにくかったり、古いものではルビを振らないと読めないものもあるので、様々な観覧者へ配慮をした展示も必要だと感じた。 「那須野が原に農場を」の観覧者数は、目標を下回ったが満足度は高く、記念講演会や見学会の参加者は多かった。那須野が原の開拓を取り上げた「日本遺産」の認定があったこととも重なり、図録の順調な販売につながったと考える。						
4. 教室講座							
4-1　講座の実施	研究成果を市民に還元するとともに、入門的なものから専門性の高いものまで多様な講座を開催します。	参加率	70%	1	70%	45%	セミナー39%、自然講座51%
		参加者の満足度（平均）	90%	1	90%	93%	セミナ91%、自然講座94%
4-2　教室の実施	博物館ならではの体験を重視し、子どもの興味関心を高める教室を開催します。	参加率	90%	1	90%	93%	化石103%、土器73%、昆虫93%、科学94%、はたお
		参加者の満足度（平均）	90%	1	90%	97%	化石100%、土器100%、昆虫100%、科学94%、はたお
4-3　親子体験チャレンジの実施	親子のコミュニケーションを深めるとともに、それぞれが楽しく学ぶことができる事業を開催します。	参加率	90%	1	90%	80%	
		参加者の満足度（平均）	90%	1	90%	84%	
4-4　博物館フェスタの実施	市民と協働して、博物館の魅力を広く周知する事業を開催します。	来館者数（延べ）	6,000人	2,400人	1,200人	1,200人	
		参加者の満足度（平均）	90%	1	90%	100%	

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標	33年度目標値(5か年)	期間実績合計	30年度目標値	30年度実績	備考
4-5 各種普及事業の実施	ワークショップや研究発表会などの普及事業を開催します。	参加率	70%	1	70%	89%	なはくAP101%、発表会77%
		参加者の満足度（平均）	90%	1	90%	86%	なはくAP100%、発表会71%
4-6 生涯学習活動の支援	質問や相談等に応えるレファレンス業務を積極的に実施し、市民の学習を支援します。	レファレンス件数	500件	134件	100件	85件	
【特記事項】	講座は一般を対象に那須自然・文化セミナー(5回)・那須塩原自然講座(3回)を開催。子ども・親子対象に化石発掘隊(1回)・子ども土器づくり教室(4回)・親子昆虫教室(2回)・子ども科学教室(3回)・子どもはたおり教室(2回)の5コースを実施。その他に親子体験チャレンジ(24回)・博物館フェスタ・なはくアートプロジェクト(2回)・地域研究発表会等を開催した。 自然・文化セミナーは前回(28年度)と比較して参加者数が23%減少した。多くの分野を設定したが関心のある回にのみ参加する傾向が見られた。自然講座は企画展と関連したテーマとしたが、「ここがおもしろい!」シリーズの前回(28年度)より5%増加したものの、目標値を下回った。子ども体験教室は、土器づくり教室では悪天候による延期の影響で参加率が低下したが、その他は参加率が高かった。親子体験チャレンジは、29年度広報の削減により参加者数が減少したが、30年度は前年比6%増でやや回復した。博物館フェスタは、ほぼ前年同等の来場者であった。なはくアートプロジェクトは好評で2回とも定員を満たした。研究発表会は参加率が過去3年で最多だったが目標に届かなかった。						
【課題・改善点等】	セミナーは次年度以降は年度ごとに対象分野を絞って開催する。自然講座は市民参加型調査を取り入れた講座に移行する。子ども体験教室は参加者の安全確保や受付方法などを改善する必要がある。親子体験チャレンジは、指導者の確保を図るとともに時期による参加者数の変動を把握し、より効果的に実施を期待する。 博物館フェスタは、歩行者天国スペースの活用や高齢層への働きかけが課題となる。なはくアートプロジェクトは実施回数を増やし、美術体験の機会を広げる必要がある。						
【外部評価委員 所見】	年間47回に及ぶ多様な講座教室等の企画・開催を数少ないスタッフで実施する博物館の努力と熱意は敬服に値する。市民ニーズの多様化により、テーマによって参加率に較差が生じるのは致し方のないところであり、参加率にあまり惑わされる必要はなかろう。日新の館で実施した掛軸体験や草木染めの教室は好評の様子なので、今後会場が博物館になれば参加者が増える可能性があり、検討すべきであろう。少子高齢化社会を反映して高齢者の教室講座への参加が多くなる傾向は強いが、将来を見据えて青少年層を引きつけるテーマの掘り出しをする必要があろう。生涯学習活動の支援としてのレファレンス業務の質問・相談内容について、どのようなものがあるかまとめる価値があるように思う。						
5. 地域との連携及び市民との協働							
5-1 市民との協働	自主団体を支援し、市民による教育普及活動を促進します。	市民に活動成果の場を提供します。					ｴﾝﾄﾗﾝｽ利用5回(個人1回・黒磯フォト・田空・栃木水の会・野鳥の会)
5-2 地域との連携及び学術的な支援	各種機関等と連携を図り、広範囲な活動を展開します。	連携事業件数	25件	9件	5件	4件	ﾋﾞｼﾞﾀｰ出張展、ｺﾝｻｰﾄ、ﾌｪｽﾀ(ﾌﾘｰﾏｰｹｯﾄ、福祉団体)、広報
	博物館の資料をもとに、文化財保護や環境保全等に関する活動を学術的な側面から支援します。	支援件数	25件	17件	5件	9件	県文化財審議会1件、文化功労者選考1件、県RDB2件、市動植物調査2件、市文化財審議会1件、鹿沼市修復委1件、常陸大宮市博物館建設検討委1件
5-3 学校教育との連携	自主団体との協働により、学校見学で来館する児童生徒に対して、展示案内・体験学習等を行います。	学校来館数(那須野が原博物館)	600校	190校	120校	95校	
		学校来館数(黒磯郷土館)	75校	22校	15校	11校	
	学校と連携して、博物館の資料を授業で活用します。また、要望に応じて職員や専門家を派遣します。	資料貸出件数	150件	30件	30件	18件	ビデオ12件、民具1件、開拓4件、昆虫1件
		出張授業件数	50件	18件	10件	10件	開こん記念祭7件 大田原高校2件青木小1
5-3 実習等の受け入れ	博物館実習や生徒の職場体験等を受け入れます。	博物館実習・職場体験件数	―	24人	―	11人	博物館実習5人、マイチャレンジ6人
【特記事項】	≪市民、自主団体による教育普及活動への支援内容≫ 石ぐら会「那須野が原入門講座」、いろりの会「昔のおもちゃづくり」、那須文化研究会「講演会」、那須野が原の自然調査会「一般向け観察会」・「ギャラリー展」、西那須野土器づくりの会「一般向け土器づくり教室」、語り部炉ばた「民話語り」、ミュージアムフレンズなすの「学習会」、ジュニア生き物クラブの活動等						
【課題・改善点等】	学校見学については、小学校の統廃合により学校数が減少する中、新規の来館となる学校もあり、昨年と比べ来館校数は同数であった。市内小学校の来館率向上に努めたい。また、出張授業は、ホームページに支援内容を紹介するなど広報を充実させ、利用促進に努める。						

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標	33年度目標値(5か年)	期間実績合計	30年度目標値	30年度実績	備考
【外部評価委員 所見】	学校教育との連携の内、出張授業件数については、年度目標を達成しており、学校減少の中で評価できるところである。資料貸出件数は、近年その件数が伸びなやむ中、昨年に比べ6件もの増加が見られ、ホームページによる紹介や校長会等で紹介を行った成果であると思われる。今後の継続を願うとともに、学校の担当者や教務主任との連携を図り、学年ごとに対応可能な支援内容を提示していけたら一般教員にも周知でき、さらなる活用ができると思われる。 市民との協働についてのエントランスの利用は、博物館を身近に感じてもらったり、博物館の活動を理解してもらったりするのに効果的であると考えるので、活用を進めていきたい。地域との連携及び学術的な支援については、ニーズがそれほど多くあるわけではないので、実績としての件数は少ないが、ニーズがあったときに適切な支援体制が整っていることが重要であると考える。 学校教育との連携については、学習内容を深めるような体験活動や展示等が充実しているので、学校の満足度は高いが、指導内容の増加により時間的余裕がなくなり、博物館の利用はしにくくなっているのが現状である。しかし、博物館における学びが子どもたちの興味関心や学習意欲をかき立てるものであれば、利用する学校は減少しないと考える、今後も、より質の高い学びを提供できるよう展示や体験活動の充実を期待する。						
6. 施設の管理運営							
6-1 施設の維持管理	快適な環境の保全に努めます。	保安、清掃及び維持管理業務の実施、計画的な機器の修繕・更新					
6-2 危機管理体制の強化	防災訓練や救急救命講習等を実施し、危機管理体制の強化を図ります。	防災訓練の実施回数	10回	4回	2回	2回	
		救急救命講習の実施回数	5回	2回	1回	2回	
6-3 施設の整備	高齢者、障害者及び外国人等へ配慮した施設の整備に努めます。						開拓概説パンフレットの多言語表記
6-4 収蔵施設の増設	収蔵庫の拡充を図り、収蔵資料の適切な保存に努めます。	収蔵庫の増設					実施なし。
6-5 附属施設活動の充実	附属施設(黒磯郷土館・日新の館・関谷郷土資料館)の特徴を活かした活動を展開します。	黒磯郷土館来館者数	7,500人	2,981人	2,500人	1,622人	
		黒磯郷土館来館者の満足度(平均)	90%	97%	90%	97%	
		日新の館来館者数	8,000人	1,926人	1,600人	930人	
		日新の館来館者の満足度(平均)	90%	81%	90%	84%	
		関谷郷土資料館来館者数	65,000人	26,011人	13,000人	13,950人	
		関谷郷土資料館来館者の満足度(平均)	90%	96%	90%	96%	
6-6 組織運営	組織の適正な人員配置を行い、効率的な運営に努めます。						
6-7 意識改革と資質の向上	研修会等に積極的に参加し、職員の能力開発、資質向上に努めます。						
6-8 広報体制	各種メディア等への情報提供を積極的に行います。また、ホームページを充実し、認知度の向上を図ります。	マスコミ・メディア等の掲載回数	200回	75回	40回	36回	
		ホームページの閲覧回数	550,000回	321,038回	110,000回	133,019回	
6-9 博物館評価	使命、方針及び中期目標に基づいて評価を行い、博物館活動の改善に努めます。						
【特記事項】	日新の館、関谷郷土資料館を平成31年3月31日付で施設廃止とした。施設の維持管理として、博物館の空調設備や中央監視装置、屋根シーリング等の交換・修繕、などを実施した。また、博物館庭部の立木の枝打ちを行った。専門研修として、埋文保存処理研修会1名、文化財セミナー2名、専門職員研修(歴史・民俗)1名を受講した。収蔵施設の増設については、早期着工の要望を行っているが、実現にはいたっていない。						

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標	33年度目標値(5か年)	期間実績合計	30年度目標値	30年度実績	備考

【課題・改善点等】	継続的な防災訓練および救命講習の実施により職員育成を図る。日新の館は、新収蔵庫建設までの一時的な資料の仮保管場所としているが、長期安定的な資料保存は不可能であり、早期に新収蔵庫が建設とならなければ館の運営に支障をきたすこととなる。
【外部評価委員 所見】	平成31年3月31日付で、日新の館、関谷郷土資料館が施設廃止となったことにより、黒磯郷土館のさらなる充実化が望まれる。特に黒磯郷土館の旧津久井家住宅は、地域文化の継承や児童の体験学習の場として活用するために、建物の保全管理の重視が望まれる。 また、博物館収蔵庫のスペース不足により、適切な保存が難しい状況であることに大変危惧する。廃止施設での資料保管は、大変不適切で危険な行為であり、これまでの評価でも指摘しているとおり、収蔵庫の増設を最優先課題として取り組んでいただきたい。各種メディア等への情報提供、ホームページをさらに充実し、館の認知度向上に努められたい。

【外部評価委員　総合所見・指摘事項】

平成30年度は、「明治150年」として、また「明治貴族が描いた未来～那須野が原開拓浪漫譚～」として日本遺産認定を受け、近代那須野が原の歴史・文化に光が当てられた。しかし、特別展「那須野が原に農場を－華族がめざした西洋－」やDCキャンペーン関連の企画展「野州塩原－温泉と渓谷に魅せられた人々－」の反応が低かったのは残念である。来館者の反応や意見・感想を集約・分析することにより、今後は、市民の負託に応える展示の目的や構成の明確化を図っていただきたい。

継続的な研究紀要の編集・発行や自主団体との連携による教室講座やセミナー活動も、地域連携を掲げている那須野が原博物館の主要活動であるが、企画・運営に関わる学芸員の苦労に比して、参加者が低下傾向にある現状は問題である。各学校には地域連携教員が配置されている。生涯学習においても地区公民館での講座や事業との連携も考えられよう。校長会や生涯学習課及び市民団体との連携を図りつつ、学芸員の多忙感解消や講座・セミナーのテーマや内容の明確化・充実化に努められたい。

那須野が原博物館協議会の答申を受け実施された附属施設の統廃合については、施設が設置されている各地域の理解や協力を得て、スムーズに実施されたと考えているが、文化に対する地域の理解や啓蒙活動の低迷も懸念される。今後も、地域連携を基本理念にしている那須野が原博物館の運営・活動が後退しないよう注視していただきたい。

地球温暖化による自然環境の激変や少子高齢化による生活環境・地域意識の変革期にあって、那須野が原地域の変容や現状を踏まえながら計画的な収集、保存及び調査研究を行っていることは評価に値する。しかしながら、貴重な地域文化遺産の消失や散逸の危機に直面している中での資料購入費の予算減は、那須野が原博物館の運営・事業の根幹を脅かすものである。さらに、各施設の統廃合により、那須野が原博物館の収蔵機能がますます厳しくなっている現状の対策が図られないのは、実に嘆かわしい。那須野が原の貴重な地域文化遺産の収集・保存・活用を保証するのが収蔵庫である。計画されている収蔵庫増設は、早急に実現していただきたい。

【博物館の対応】

現在、収蔵庫が飽和状態となっており、什器等の保管も含めて、スペースが足りず、博物館活動全体において支障が出ている。新収蔵庫の設計は完了しており、早急なる収蔵庫の建設を要望していきたい。調査・研究においては、紀要の発行を継続的に行うことで、資料の記録化を継続していくことが重要と考えている。調査については、各分野ごとに個々に進めているが、自然・人文共に地域の総合調査の必要性は認識しているものの職員体制の面で組織化を図ることができないのが現状である。

市民に直接的に関わる教育普及事業においては、事業ごとにアンケートを取り、その事業の評価と問題点を抽出し、「事業別自己評価票」を作成し、さらに、この評価シートに反映させている。展示事業においては、企画展の観覧者数は、目標値を超えているが、今後もテーマの設定や展示内容の精査・市民ニーズを捉えながら開催していく必要性を痛感した。教室・講座等の事業においては、子ども向けの教室は、体験・実験・観察を取りいれての事業展開であり、多くの申し込みがあり評価されているが、一般向けの講座等では受講生が少ない。他の施設での開催も含め多様化していることも確かであるが、座学だけでなく事業の工夫や広報にも心掛けて行きたい。また、美術の定着を目指し、美術作家と美術の親しむワークショップ「なはくアートプロジェクト」については、実施回数を増やし継続して実施していきたい。

博物館は市民との協働を推進しているが、行政の補完であってはならないと考える。博物館関連団体の中には活動が困難となっている団体が出ており、業務の改善・工夫で乗り切って行くほかないが、今後の対応等が急務となってきている。附属施設については、日新の館と関谷郷土資料館を廃止したが、資料の収蔵や施設の活用といった問題が残っており、解決に向けた調整が必要となってきている。

博物館は、資料の収集・保存・調査・研究・教育普及活動と幅広い活動領域で、市民の皆様に目に触れない部分も多く存在する。そのためにも、この博物館評価を実施することで、少しでも理解が図れるようにするとともに、市民との協働を標榜する博物館として、情報の共有を図る目的もある。

外部評価委員
令和元年度那須塩原市那須野が原博物館協議会委員

相澤　圭子	磯　　恵美
高根沢広之	後藤　英雄
木村　康夫	川島　勝子
杉田　智生	松村　　雄
千葉　昭彦	君島　章男